

SPELT

May 2016 Vol.5 No.1

実用英語教育学会

NEWSLETTER

目次

[巻頭言「第5回研究大会を終えて」](#)

釣 晴彦（実用英語教育学会会長）

第5回研究大会について

基調講演

[「小中高大連携のこれまでとこれから—旭川の試み」](#)

松井 徹朗（元 旭川北高校 教諭）

発表 1

[「文法指導における中高連携の必要性」～オーラル・イントロダクションでできること～](#)

佐藤 千秋（帯広市立帯広第八中学校 教諭）

発表 2

[「卒業後も学びたくなる」英語の指導を目指して](#)

白鳥 宏之（北海道函館中部高等学校 教諭）

発表 3

[北海道における高等学校の英語教育～この10年の歩み～](#)

白鳥 金吾（北星学園大学短期大学 専任講師）

シリーズ [「小学校からはじまる実用英語教育」](#)

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

[お知らせ](#)

巻頭言

実用英語教育学会 第5回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会も第5回研究大会を終えました。ニュースレター発行に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

最初の研究大会報告者は、帯広市立帯広第八中学校の佐藤千秋先生が「文法指導における中高連携の必要性～オーラル・イントロダクションでできること～」のテーマで、ソーシャル・ネットワーク・サービスの具体的な活用方法を提案して頂きました。確かに北海道の地理的条件を考えると、ウェブ上で指導方法を共有することで異校種間の交流も容易になるので今後のネットワークの構築で可能性が広がると思いました。

松井徹朗先生の基調講演は、実践者であるだけの説得力がある講演内容でした。「訳読中心の授業が当たり前と思っていた私たちにとって、オールイングリッシュの授業は別世界。個々の教師がそれまでの指導をリセットするところから始めなければなりません」と当時を振り返り、SELHi スーパーイングリッシュ・ランゲージハイスクールの指定を受けたことをきっかけに、授業方法や評価規準について研究を進め、訳読中心の英語の事業の抜本的な見直し改革を実践してきたそうです。意識したコミュニケーションの作り方や在り方を実践から私たちに示唆してくれて大変印象に残る講話でした。

また「コミュニケーション英語Ⅰ」で今まで作成された Teaching Procedure を印刷して持参して頂き本当に感謝申し上げます。

講演後の研究大会報告者は、函館中部高校の白鳥宏之先生です。旭川北高校から十数年前函館中部高校へ異動。英語科の取組について、現在旭川北高校とハンドアウトの共有化を図り、チームワークの向上、授業との整合性を持たせた定期考査の在り方、教科書選定の方針等、精力的に活動し

ています。CAN-DO リストを踏まえた授業及び評価の在り方についても、研究活動を行っています。この発表後の3月4日に学校としての優れた実践取組を表彰する ELEC 英語教育賞を受賞しました。「考えるプロセスを重視した授業づくりーコミュニケーション育成のための授業研究ー」としてのテーマで、日頃からの実践が高く評価された結果であると思います。お目出度うございます。

その後は北星学園大学短期大学専任講師の白鳥金吾先生の発表でした。北海道教育庁学校教育局高校教育課普通教育指導グループの主査であった時、白鳥先生は文部科学省の要請を受け様々な取組を行い、特にイングリッシュ・キャンプは小・中・高の連携を視野に実現して注目を得ました。今回はその結果の分析と検証を行ってくれて、私たちが知らない現場の現状にも触れて頂き大変参考になりました。

実用英語教育フォーラムでは、「小中高大連携のこれまでとこれから」という題で行われました。これには川端一正先生（3月まで岩見沢東高校、4月からは古巣である旭川北高校に勤務）の参加も頂き、短い時間でありましたが、発表者、講演者を含め、今の課題から展望について話を頂きました。その流れで夜の懇親会も多くの方が参加して頂き大変熱い教育論を語る会になりました。今回の研究会は、人との繋がりから現場の教育体制のあり方みたいなものを少し垣間見ることが出来る内容でした。

この学会は、活動を広く共有出来る方々に発信し、手法をさらにシェアして共に学んで歩んでいきたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第5回研究大会について

2016年2月20日(土)、札幌大谷大学において第5回研究大会が開催されました。小・中・高・大学をはじめ英語教育に関わる方が大勢参加してくださいました。基調講演と研究発表に加えて、釣晴彦先生(札幌学院大学)のコーディネートによるフォーラムでは、基調講演者の松井徹朗先生、研究発表をして頂いた佐藤千秋先生、白鳥宏之先生、白鳥金吾先生に加え、旭川北高校(元岩見沢東高校)の川端一正先生にご登壇頂き、中学校と高等学校での実践と評価の連携や今後の課題について議論しました。フォーラムを通して、中高の連携について深く考える貴重な機会となりました。

今回は、基調講演および研究発表の内容をお届けいたします。

< 基調講演 >

「小中高大連携のこれまでとこれから—旭川の試み」

松井 徹朗 (元 旭川北高校教諭)

今の英語教育の課題

「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール (SELHi)」の事業は、現在の英語教育にどのような効果をもたらしたのだろうか。その問いに十分な答えが出ているとは言い難い。SELHiの指定を受けながら、授業方法や評価規準などの研究に取り組んだ経験を踏まえ、まず現在の英語教育の課題について述べる。

● ALT が活用されていない。

ALTは、オーラルコミュニケーション(OC)の授業があったときは良かったけれど、今では作文の点検、添削で忙しく、教室に入ることがあまりないという。それは、「英語表現」の教科書が文法ベースに作られてしまったからである。希望とやる気に満ち日本にやって来ても、失望して1年で帰ってしまうALTがいることは大変残念だ。

● 教科書が面白くない

検定教科書の内容は、教師自身が教えていておもしろいと思えるものだろうか。生徒の日常生活とあまりにもかけ離れた話が出てくるような単元では、せいぜい内容についてのQ&Aで時間をつぶすくらいしかできず、生徒を発展的インタラクションに引き込むことは難しい。さらに、難易度

という点では、Communication I で難しい教科書を選んでしまったら Communication IIIで悲鳴を上げるはめになる。訳読以外の方法で理解させることが、ほぼ不可能となるからだ。こういった問題の対処としては、教科書以外の教材をうまく活用するしかない。また、マザーテレサや地球温暖化、絶滅危惧種といったテーマが検定教科書でよく扱われているが、それらは子供たちが中学卒業までの段階で、すでに他教科の教材等で学んでいる内容である。それを再度、高校で扱って、生徒の意見を聞いても誰もが同じことしか答えない。だから、コミュニケーション教材としてはもう賞味期限が切れているのである。そのテーマに関連する「生徒がまだ知らない事実」を扱う教材を外に求めるしかない。そこで初めて生徒との意味あるインタラクションが可能となる。また、教科書を順番通りにそのまま教えるというのではなく、面白い話題や素材を教科書からうまく取り出すということも大切である。

時には、授業から意図的に逸れ、寄り道をしながら生徒とのインタラクションを図ることもある。インタラクションでは、教師が最後に答えを与えるのではなく、生徒に考えさせるようにしている。例えば、“What are the delightful things that

money can buy? Name/Make a list of them.”

といった問いを授業で投げかける。生徒から色々な答えが出る中、あえて教師が“Love”を挙げる。ええっ?というような顔を生徒が見せると、「じゃあ、女の子だけに聞けど…」とあって、二人の男性のイラストを黒板に描き、一方に“a poor handsome young man”、もう一方に“a rich handsome young man”と書く。そして、この二人に手を差し伸べられたら、どちらの手を取る?と聞く。ただ、聞くだけ聞いて、答えは出さずにその日は終わる。Why?と聞かず、そこでその日の授業を終わることで、生徒自身に答えを考えさせるのがポイントである。

11年前の話

旭川北高校に勤務していた2005年7月に文科省の担当者から「ここで英語教育を変える」ので、9月から“all in English”で授業を実施するようになると言われた。急な指示だったが、実施しないわけにはいかず、9月から英語のみで授業を進めた。生徒の考えを知るために、授業開始から2か月後の11月のロングホームルームの時間に無記名アンケートをとった。「授業で何をやっているのかわからない」と多くの生徒が回答するだろうと予想していたが、集計してみると、「楽しい」、「50分が短い」、「この授業を受けていれば英語が話せるような気がしてきた」というようなものが大半で、4人だけ「これで大学受験は大丈夫でしょうか?」という不安を示す回答があった。つまり、生徒自身が“all in English”の授業を受け入れたということになる。

いま全国で

最近では、私のほうへ全国の高校の先生方から、その高校で使用している教科書（*Element* や *CROWN* など）を用いて、自分たちの生徒を対象に“all in English”の授業をして見せてほしいという要望がある。多くの先生方が、現在の英語の授業を変えたいという高い意欲を持っているが、なぜ変えたいのだろうか。現在の授業事情を挙げて考えてみたい。

□ 現在の英語授業

● チャンク・リーディング

コミュニケーションを重視した英語の授業になってから、チャンク読み（chunk reading）が盛んだが、これで参っている先生も多い。

● ペアワークやグループワーク

「Communication 英語Ⅲの授業でペアワークやグループワークが授業の何割を占めていますか」という、まるでペアワークをやっていないければよい授業じゃないというような変なアンケートが最近来た。それが「変」なのは、(1) 3年生の10月になったら、そんなことばかりやっていないはずだし、(2) ペアワークは、ペアでやる必然性がなければ意味がない。(3) そもそも、ペアワークが嫌で学校に出てこなくなる子もいるくらい注意を要する側面も持っている。コミュニケーション上の必然性がなく、ただの訓練としてのペアワークは害が多い。（ペアの二人が言えたら座る、というような活動をする先生がいるが、言えない子はペアの子に迷惑をかけていると思って、それが嫌で授業に来なくなる。例えば、ある日、私の靴箱の中の靴の中に「ペアワークの時に好きな人を選んでやるペアワークをやめてほしい」というメモがあったこともある。生徒にとってはストレスフルな活動であることは否めない。ペアワークを否定する気はないが、ペアワーク中心の授業はだめだと考える。

● 自分の生活のこと（家族や友達のことや、どこに住んでいるとか、どこそこに行ったことがあるとか）を共有させていない

個人情報だからとか、本当のことを言わせると生徒が傷つくとか、という心配があるが、自分のことを言えずにコミュニケーションなど考えられない。だから、「英語の授業はウソついていいよ!」（“You can invent stories!”）と言っている。何気ない会話（small talk）や授業のウォーミングアップの会話などで、“ウソ”でもいいから、どんどん“本物”のコミュニケーションをさせるべきだ。

- **教科書の作り方: Can-Do Statement が書けないものがある**

教科書によっては、それを読んで何ができるようにするということが **Can-Do Statement** の形で表せないものがある。教科書の英語を読んで何ができるようになるのか、必ずしもよく考えられて作られているわけではない場合がある。

ではどうするか？

- **対面でのコミュニケーションを大事にする。**

英語で授業を実施してきた数年後に旭川北高校の GTEC のテスト結果が出てきたが、ずっと “all in English” の英語授業を受けてきたにも関わらず **listening** のスコアが低かった。英語が《できる》子に、どうしてなのかと聞いたら、「当たり前でしょ。しゃべっている人の顔が見えないんだから。」と答えた。つまり、口頭でのコミュニケーション (verbal communication) で視覚的な合図 (visual cues/visual clues) を生徒たちが大切にしているということがわかった。

- **高校の教科書だけに頼らない。**

そもそも高校の教科書に出てくる文法項目の中には日常生活の中で出てこないものもある。(例: No sooner than... ~するやいなや... は、村上春樹の小説の 2000 ページに 1 回くらいの割合で出てきたり、John Lennon の伝記に 2 回出てくる程度だ。) ペーパーバックに書かれているような英語がわかる想像力を鍛えることが必要である。生徒に 100% の理解を求めない。「7 割分かれば、あと 3 割で…」と言ったら、「とんでもない！」とネットで書かれた。しかし、100% 正確に訳せた生徒が本当に「理解した」生徒とは言えない。7 割しか正確に訳せなくても、文に込められた意味を想像できる力をつけてやるのが大事なのだ。

Communication というのは、生徒が絶え間なく話していれば成り立っているというものではない。英語の時間に生徒の創造力を鍛え、真のコミュニケーション力を育成していくことが重要である。

(文責: 編集委員)

< 研究発表 >

発表 1: 「文法指導における中高連携の必要性」

～オーラル・イントロダクションでできること～

佐藤 千秋 (帯広市立帯広第八中学校 教諭)

1. はじめに

以前は、中学では活動中心の授業で受けていたことから、講義形式の高校の授業に戸惑っている卒業生と話をする機会があった。今後は、英語で授業が進められる高校の授業を意識した指導方法の工夫と改善を中学校でも進めなければならない。文法指導に関しては、古くからオーラル・イントロダクション (以下 **OI**) が

知られている。これは英語で既習の知識と新出の学習項目を対比しながら学び、基本的に英語で進められる。そのため、「英語で進めることを基本とする」英語の授業を実施する際に有効な手法と考えられる。

2. OI の実施状況

調査の結果、**OI** をすべての文法項目で実施し

ているのはアンケートの対象となった英語教員の25%程度であった。一方、OIの実施に消極的な回答をした人の割合は約27%であった。その理由は、「生徒が混乱しそう」「生徒にとって難しそう」と考えていることがわかった。また、OIを用いない場合、「口頭で英語を使うゲームやアクティビティを通して文法が自然に身につくように指導する」という解答が多く、次に「自作教材や教科書の例文を用いて日本語

で文法を解説する」という回答が多かった。

3. 生徒から見たOI

本校第2学年で行った調査では、入学当初から新出文法はOIで指導してきた生徒の95%が「英語の学習に役に立っている」と回答した。また、既習の知識と比較しながら新出文法の特徴に生徒自身が気づくことを重視しているため、OIを実施している最中は生徒と教師間に英語による情報のやり取りが生じる。そのため生徒からは英語を活用することに対して前向きになったという感想を聞くことがある。教員が思っている以上に生徒はOIに順応することがわかる。

4. まとめ

OIは英語で授業を進める際に有効な指導方法のひとつである。今後、その指導方法を充実させることは、英語で進められる高校の授業に生徒がスムーズに対応できることにつながると考える。そこで実施するには困難さを抱えている場合にはソーシャル・ネットワーキング・サービスなどで実際の指導方法を動画で共有することが有効であると考えられる。北海道の地理的条件を考えると、ウェブ上で指導方法を共有することで異校種間の交流も容易になると考える。

表1 OIの実施状況

	人数	割合 (%)
どの文法でも使う	13	25.0
文法項目によっては使う	25	48.1
ほとんど使わない	10	19.2
全く使わない	4	7.7

回答者：小（2名）中（36名）、高（11名）、大（2名）

表2 OIを実施しない理由

	人数	割合 (%)
生徒が混乱しそう	6	40.0
生徒にとって難しそう	5	33.3
英語で進める自信がない	4	26.7
効果があるとは思えない	3	20.0
準備に時間がかかりすぎる	2	13.3
具体的な進め方がわからない	2	13.3

回答者：中（9名）、高（5名）

発表2：「卒業後も学びたくなる」英語の指導を目指して

白鳥 宏之（北海道函館中部高等学校 教諭）

本校英語科の取組みの概要

以前行っていたドリル・暗記重視型の授業スタイルを根本から見直し、評価項目が「知識・理解」に偏重することなく「思考・判断・表現」ひいては「考える要素」をバランスよく取り入れた授業スタイルに変更した。キーワードは、「即興」と「自己表現」。

教員集団の連携も重視し、部会での定期的な共通理解や、教材の共有、CAN-DOを活用した「英語教員団全員で行う英語指導」を心掛けた。

1. 「コミュニケーション英語基礎」の積極的な導入

カリキュラムの見直しにおいて、敢えて「コミュニケーション英語基礎」を履修するようにした。結果として生徒、教員ともに好評で、英語で行う授業への導入として非常に効果があった。平易な英語を用いることは、生徒だけでなく授業者である教員も無理なく教室英語に慣れていくことができた。

2. 目標 (Can-Do 到達目標) の設定

「教員間の共通理解と相互協力」を図り、Can-Do 到達目標をスタッフ全員が一丸となって作り上げている。意見を交えて目線を合わせていくことで、各々の教員の個性を活かしながらも同じ目標へ向かう協力体制ができた。

3. 教材の精選

検定教科書を使用するとともに、副教材の精選に力を入れた。新学習指導要領の狙いを根底に、生徒が身近なテーマとして考えやすい題材を平成 25 年度より使用している。



【使用している副教材】

- 1 年生：コミュニケーション英語Ⅰ：
Essential Reading 1 (マクミラン)
英語表現Ⅰ：Take it easy
(センゲージ・ラーニング)
- 2 年生：コミュニケーション英語Ⅱ：
Select Readings Pre-intermediate
(オックスフォード出版)
- 3 年生：英語表現Ⅱ：Key words for Japan
(センゲージ・ラーニング)、他

4. 「授業と評価を乖離させない」

授業内容と評価内容を乖離させないため、定期考査の他に、定期的にパフォーマンステストを実施して評価内容を改善した。

- (1) 平常点：インタビューテスト (年 2 ～ 3 回)、スピーチ、プレゼンテーション、提出課題、等
※定期考査との比重は 50 : 50 以上

(2) 定期考査：

- ・学習した言語材料を用いて即興で考え書かせるエッセイ
- ・テキストで扱ったテーマに関係する別の英文の内容理解
- ・教科書本文や和訳は一切出題しない。
(暗記力テストにしない)、など

コミュニケーション力育成重視型に切り替え、スタッフの試行錯誤や悪戦苦闘が続いているが、GTEC for Students スコアやセンター試験平均点では、従来型授業実施時と比較して、年度を追って大きな伸長・向上が認められ、生徒の高い自己評価も得ている。

発表 3：北海道における高等学校の英語教育～この 10 年の歩み～

白鳥 金吾 (北星学園大学短期大学 専任講師)

1. はじめに

北海道では、これまで数多くの高等学校が、国や道の英語教育に関する研究指定校として、学習指導や評価方法の改善に取り組んできた。本発表では、学習指導要綱の変遷や研究指定校の動きに焦点を当て、この 10 年の北海道の英語教育の動きを振り返り、今後の英語教育の在り方を考察する。

2. 外国語教育の変遷

外国語教育は、当時の言語観や教授法を背景に、「知識教育」、「技能教育」、「伝達教育」の流れで変

遷してきた。知識教育の時代においては「文法訳読式教授法」が主流であったが、現代ではコミュニケーション能力の向上が見込めない教授法として批判の矢面に立つことが多い。技能教育の時代は「オーディオリンガル法」が主流となりパターン・プラクティス等の言語活動が授業にさかんに取り入れられたが、実際のコミュニケーションの場面では有効ではないとの評価を受けた。コミュニケーション志向の高まりを背景に「伝達教育」の流れが現在まで続いており、「Task-based Language Teaching」から「Content-Based Approach」や「Content and

Language Integrated Learning (CLIL)」に至る内容重視の教授法が注目を集めている。

3. 学習指導要領の変遷

「知識教育」から「技能教育」への変遷の過程で平成元年に学習指導要領の改訂が行われた。「オーラル・コミュニケーションA,B,C」が導入されコミュニケーション能力の向上が重視された。一方、学校現場では「文法訳読式教授法」からの脱却が容易に進まず平成元年改訂は空洞化の憂き目を見ることとなった。グローバル化が加速し英語が世界共通語となる中で、平成10年改訂では英語が必修科目となり実践的コミュニケーション能力が一層重視され、平成21年改訂では「授業を実際のコミュニケーションの場面」とするため、高等学校では「授業は英語で行うことを基本とする」との方針が示された。ここに至って、教員の側には伝統的な言語観や指導法に代わる新たな指導法への転換が強く求められた。

4. 指定校事業の動き

学習指導要領の理念と学校現場の実践を繋ぐ斬新

で具体的な施策が求められる中、2003年に文部科学省から『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』が発表された。この計画に基づく研究指定校事業が北海道の英語教育を活気づかせた。多くの優れた授業実践が生まれ、道内の学校ではこうした授業の共有化が進んだ。その後、多くの高等学校が国や道の英語教育関連事業の指定校となり、新しい指導法についての情報や意見交換が活発に行われ実践的研究が加速した。特に旭川北高校、函館中部高校、滝川西高校、利尻高校、豊富高校等の実践は、全国からも注目を集めることとなり、学習指導要領の改訂や英語教育の動きに対する実践的側面からの新たな視座を与えた。

5. おわりに

研究指定校での実践は、今後の英語教育の方向性を考える上で、いまだに多くのヒントがある。私たちは、こうした学校の実践を絶えず評価・検証し、次世代に引き継いでいく責務がある。

シリーズ 小学校からはじまる実用英語教育

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

第9回 「“Yes” は “Yes”, “No” は “No”」ー その2

日本人が “嘘つき”、呼ばわりされる理由

“Yes” と “No”, この二つの短いことばを使いそこねると、それだけで、最悪の場合には《嘘つき》の汚名さえ着せられ、信頼を失ってしまいかねない。これが前回お伝えしたことでした。ただ、この問題はいつも起こるわけではなくて、否定疑問文に答えるときにだけ起こるということでした。

具体例を通して、もう一度この問題を思い出してみよう。夏休みを利用して日本を訪れ、ホストファミリーのAさん宅に滞在しながら日本語を勉強中のカナダ人BさんがAさんとこんな会話を交わし

- | | |
|-------|--|
| 第1回： | ○と× |
| 第2回： | 数と数字 |
| 第3回： | アルファベット |
| 第4回： | “Nice to meet you.” と “Good to see you.” |
| 第5回： | “Excuse me.” と “I’m sorry.” |
| 第6回： | “Sir” と “Ma’am” |
| 第7回： | “Uh-huh” ・ “Uh-uh” ・ “Uh-oh” |
| 第8回： | “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (1) |
| 第9回： | “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (2) |
| 第10回： | ほめる・頼む・感謝する・同情する |
| 第11回： | 仕草と埋草 |

ました。

A「今日は手伝う宿題ありませんか？」

B「はい、ああ…。」

A「えっ、本当に手伝うことないの？」

B「いいえ。この宿題がわかりません。だから、教えてください。」

一瞬会話が食い違いましたね。Bさんは「はい、あります」と言いたかったのですが、言い終わる前に、Aさんが「はい、ありません」と解釈してしたために、ちぐはぐな会話になってしまいました。

英語の規則は極めて単純で、あとに肯定文が続くなら“Yes”を、否定文が続くなら“No”を使う。ただそれだけです。ところが、日本語で「はい」と言うか「いいえ」と言うかは、うしろに肯定文が続くか否定文が続くかは全く関係がありません。

日本語の「はい」と「いいえ」は、事実を肯定または否定しているのではなく、相手の頭の中にある前提を肯定したり、否定したりしているのです。つまり、相手の頭の中にどんな前提があるのかを判断して、その前提に対して「あなたのその前提は正しい」または「間違っています」というコメントを「はい」と「いいえ」で伝えているのです。相手の頭の中にある《前提》を判断する、すなわち、推測するのですから、当然、判断の間違いが生じます。判断が間違っていれば、これまた当然のことながら、誤解は避けられません。

上の例で、AさんがBさんに「今日は手伝う宿題ありませんか？」と聞いたとき、Bさんは、もし手伝ってもらいたいことがあるなら、英語では“Yes”と言えただけです。「ある」という肯定文が続くから“Yes”。実に単純です。その単純な英語の応答規則に従って、Bさんは「はい」と答えました。一方、Aさんは、「今日は手伝う宿題がありません」という自分の前提は「正しいですか？」と聞きました。この場合「はい」と言うのは、「宿題がありません」という前提が正しい場合ですから、Aさんは、日本語の規則に従って、「自分の前提は正しい。『今日は手

伝う宿題がありません』なんだ」という解釈をすることになってしまいました。英語話者のBさんが、「あります」が続くから「はい」と切り出すのではなく、Aさんの前提を理解して、それを「いいえ」と否定していれば、食い違いは生じなかったのです。

日本語では、相手の前提が肯定の場合も否定の場合もあるため、その前提を肯定する「はい」と否定する「いいえ」との組み合わせは、それぞれ2通りずつで、全部で4つの答え方—「はい、あります」・「いいえ、あります」・「はい、ありません」・「いいえ、ありません」—があり、実に厄介です。

実際、この問題に困るのは、日本語の規則に明るくない外国人だけではなく、ネイティブの日本人だって同じです。「今日は手伝う宿題ありませんか」と聞いた本人が相手の答えについて持っている前提が、聞かれた本人の解釈と違っていれば、相手の「はい」と「いいえ」は完全な誤解を生みます。私たちが日本語で行っているコミュニケーションでも、否定疑問に対しては、前提の解釈が異なり、同じ質問に

対する答え方に個人差があることが分かっています。¹

日本人は、間違った解釈をされないように、イントネーションを変えたり、「～ない？」のあとに「の」や「ね」という助詞をつけることで正しい解釈が導きやすくなる努力をしています。でも、文尾を揚げ調子にして、何の終助詞も付けずに尋ねることが固定している典型的な勧誘文（「～しませんか」・「～しない？」）については、どうしようもありません。例えば、

母：「シャワー入る前に朝ごはん食べない？」

子：「うん。」

母：「うん、何？食べるの、食べないの？」

こういう親子の会話、「ある、ある」と思いませんか。この問題は、それだけで日本語学の論文になるので、ここではこれ以上論じることとはしませんが、

英語圏の人たちにとっては、「あとに肯定文が続くなら“Yes”を、否定文が続くなら“No”を使う。」という単純な規則に従うことが、世界で最も“賢い”民族に数えられる日本人にとってこれほど難しいことだとはおそらく想像だにできない…。

¹ 佐々木英樹 (1990). 「日本語の否定疑問文に対する応答文: 英語教育の立場から」『駒沢女子短期大学 研究紀要』23, pp.93-101 参照。

「はい」と「いいえ」に関する限り、日本人はほとんどなく複雑な言語規則を使っているということになります。

そして、日本人が英語話者を相手にこの規則を適用して、「はい」の直訳“**Yes**”を「はい、ありません」という意味で使ってしまうなら、“**Yes**”（「はい」）の後には100%常に「あります」という肯定文が続く英語圏の人々には、その日本人の「はい」は完全な嘘になってしまうのです。そうです。“**Yes**”と“**No**”の使い方を期せずして間違ってしまうことが原因なのに、聞いた英語話者は、これを日本人が意図的にやっていると理解してしまうのです。なぜでしょう。定説があるわけではありませんが、英語圏の人たちにとっては、「あとに肯定文が続くなら“**Yes**”を、否定文が続くなら“**No**”を使う。」という単純な規則に従って、“**Yes**”と“**No**”を正しく使い分けることが、世界で最も“賢い”民族に数えられる日本人にとってこれほど難しいことだとはおそらく想像だにできないことだからでしょう。

このように、私たちが日頃意識せずに運用している日本語の言語規則を、英語を話すときにも無意識に使ってしまうことによって、言いたいことが真逆に理解されてしまうことがある。それがほんのちょっとした言葉の使い方一つで引き起こされてしまうので、余計にたちが悪い。だから、こういう無意識に起こる間違いは、小学校のときからしっかりと、意識的に取り組んで、子どもたちが英語でコミュニケーションをとるときの妨げにならないようにしたいものです。

“**Yes**”と“**No**”が「日本人のコミュニケーション・スタイルに関わる根の深い問題」って？

でも、無意識に起こる間違いの原因は、言語の規則だけではありません。日本人のコミュニケーション・スタイルに関わる根の深い文化的な問題もあります。

文化というのは、その言語を話している人々の言語生活と深くかかわっているものなので、もし日本の文化が英語という言語の習得の妨げになる要素を持っているとすれば、小学校から根気強くその妨げを乗り越えていく練習をさせる必要があります。前

回のおさらいが大変長い前置きになってしまいましたが、それが今回の連載で皆さんにお伝えしたいメッセージです。ただ、「小学校から根気強く」と言っても、やはり、「もっとすぐに何とかできる方法はないのか」と思う向きもあるでしょうから、今回は、そのような問題に対する《即効薬》もいくつかご紹介しようと思います。

“**Yes**”/“**No**”の文化的問題

“**Yes**”と“**No**”が文字通り“**Yes**”と“**No**”を意味する文化の人にとっては、文脈によって“**Yes**”の意味するものが“**No**”の意味するものと同じになり、“**No**”の意味するものが“**Yes**”が意味するものと同じになる日本語の文化を理解するのは、本当に大変なことでしょう。そのような場合、より複雑な規則で動いている文化を持った日本人の方が、より単純な規則で機能している文化圏に属する人たちを助けてあげるのが一番早道に思えます。しかし、それがそれほど簡単なことではありません。なぜなら、ことばづかいは、注意すればすぐに直るかもしれませんが、長い間時間をかけて身につく文化行動の領域に属する問題があって、これは、ふるい落とそうと思ってもなかなかふるい落とせるものではありません。

言語規則によって“**Yes**”が“**No**”になり、“**No**”が“**Yes**”になるのではなく、いわば《文化規則》によって同じことが起こる具体的な例を見ていきましょう。今回は、外国人に日本語と日本文化を教える日本語教育の世界で学んだこと、また、学べることをいくつか紹介しながら話を進めていきます。

もう一杯いかがですか— “**No**”が実は“**Yes**”

昔、アメリカで日本語を教えていた頃、学生が不思議がるので結構教えるのが楽しみだったのが、招かれた先で何かを「もう一杯、いかがですか。」と言われたら、いただきたくても、まず礼儀として「いえ、結構です。」と言う。すると、必ず相手が「あら、お口に合わなかったのかしら？…」などと言ってプッシュしてくるだろうから、その時

点で「じゃあ、(遠慮なく)いただきます。ありがとうございます。」と言うんだよ、と教えるところでした。日本人の「いいえ、結構です」を文字通りの “No, thank you.” とは取ってはいけない。少なくとも、2回 “Are you sure?” とプッシュしろと教えます。これは、“No” が本当は “Yes” だという文化的な問題の一つ目です。尤もこれは日本人の専売特許ではないようです。インターネットを見てみると、ロシアや中国やシンガポールもそういう慣習があるようです。スロバキアの某大学の芸術学部の『言語学の諸問題』という紀要には、「コーヒーやデザートをもう少しいかがですかと聞かれた客が『No』と言ったら、アメリカ人の主人(ホスト)は、それは客人の偽らざる気持ちで、本当に欲していないんだと思います。これはスロバキア人の行動とはきわめて対照的です。スロバキア人なら、3回断ってから、初めてその勧めに応じます。」と書かれています。スロバキアでも、勧められたら少なくとも3回は断るのが礼儀のようです。でも、アメリカの文化ではそうではないんですね。²

玉虫色の返事— “Yes” でも “No” でもない “Yes” は “No” と同じ

二つ目は、反対の場合です。“Yes” と “No” ともとれないために、本当は “Yes” であっても実質的には “No” と取られてしまいかねない例。再び、マローニのことばから。

……外人諸氏には私の言わんとすることが、きっとおわかりだろう。ただ一言「イエス」か「ノー」と答えればよいような質問をした時でさえ、日本人は答えを出すのに何時間もかけ、その挙句に「イエス」でもない「ノー」でもない、どちらともつかないような返事をする。いわゆる、玉虫色ってやつだ。³

この「玉虫色」の返事を経験してとまどうのは「外人」だけではありません。日本人である私自身が

この日本流の「玉虫色」の返事をアメリカで体験したことがあります。ある年、ジョージア州の某日本企業に勤務するかつての教え子から SOS が入りました。私がコーディネータを務めていた日本語集中プログラム⁴にもう一度参加するため8週間の長期休暇を取らせてもらいたいのだが、上司が「久野先生」の話を聞きたいと言っているので説得に来てほしいというのです。その頼みを断る理由のなかった私は車を走らせ、彼の二人の上司(日本人とアメリカ人)との直談判に向かいました。私は15分程度のプレゼンを行い、すべての質問に答えました。30分後、アメリカ人の上司の言動からはすでに彼の願い出を認める用意があるということが読み取れました。二人がその場で決断できるものではないらしく、即答はありませんでしたが、そのアメリカ人上司からは、結論は “Yes” だという合図がいくつも出ていたように記憶しています。しかし、一方の日本人の上司の受け答えからは、認める用意があるのかどうか、なかなか手がかりがつかめず、最終的にわからずじまいで終わりました。所詮他人のことなので、私にとってはどうでもいいことでしたが、わざわざ2時間半もかけて車でやってきたのだから、その2時間半の運転が報われるのか、それとも、無駄になるのかがその場でわかれば、やはり、ありがたいという気持ちはありました。アメリカ人の上司は、その辺の私の気持ちを察して、いろいろな合図を出してくれたのだらうと思って、私は、大変好感を持ちました。二人のうちの一人が勝手にその場で即決するというやり方はとれなかったのでしょうし、きっと日本人の上司の方が位は上だったはずだからなおさらでしょうが、そのような制約の中でも、アメリカ人の上司は自分ができることをすべてしてくれたのだということがわかりました。この直談判がどれほど影響したのかはわかりませんが、後日、彼の願い出が承認されたとの連絡が入りました。とても嬉しかったのですが、そのこと以上に嬉しかったのは、アメリカ人と日本人とではこんなにも意思伝達の

² Kacmárová, Alena. (2008). “Politeness Issues from a Slovak Speaker’s Perspective (When in Rome..., Nitra 2003, Revisited),” *Topics in Linguistics*, 2, pp.18-22.

³ ドン・マローニ『続 外人はつらいよ』(角川文庫, 1984), p.32.

⁴ 函館市にある HIF(Hokkaido International Foundation)という財団法人(日本語名称は北海道国際交流センター)が1986年以来開催している8週間のホームステイプログラム

方法に差があるのだということを直に学べたということでした。

微笑みと拒絶の共存 smile≠“Yes”

三つ目は、二つ目と同じ、“Yes”のような表情が実は“No”を現わしているという例。Baker, Donelson, Bearman, Caldwell & Berkowitz PC社のコンサルタント Masae Okura 氏は、日本企業との取引が具体的な交渉の段階へと進んだとき、アメリカ人はどのような行動を取るべきかについて次のような助言をしています。この助言を通して、日本人が「ノー」ということを示す場合に、どのような行動をとっているかが分かります。

How should you behave once you get to negotiations? ⁵

一旦交渉の席にこぎつけたら、次に注意することは何か？

話が本題のビジネスに入ったら、声を荒げるようなことがないようにしてください。絶対に。たとえ何か不愉快なことが出てきてもです。感情を表に現してはいけません。なぜなら、感情を表に出すと、あなたは感情をコントロールすることができない人間だという刻印を押されることになり、日本人の信頼を失ってしまうことになるからです。何があっても、冷静を保つこと。嫌な気分になっても、いや、むしろ嫌な気分になったときこそ、表情に笑みを浮かべることです。

もう一つ理解しておくべき大事なことがあります。それは、日本人の間では、不同意を口にしたり、「ノー」という返事を返したりすることが失礼なことだとみなされるということです。ですから、もし日本側が商談を成立させたいと思っている場合は、彼らの顔にはすてきな笑みがこぼれ、口からはうやうやしいことばがあふれ出てくることでしょう。同じ理由から、もし、その表情に慇懃無礼な笑みがあるだけで、前向きなことばが出てこない場合、例えば、次の会議をいつ行うかなどのお話が出てこない場合は、それによって、あなたは、あなたのそれまでの努力が功を奏さなかったということを知られたことになるのです。

このような助言を聞かずに日本企業と交渉の席に着くと、笑顔を“Yes”，すなわち、契約成立の可能性あり、という意味に勘違いして、次の交渉

の準備をし、成立する見込みのない商談のために多くの時間とエネルギーを無駄にすることになります。欧米の企業が最初にこのような助言を耳にした時、それは相当なショックに違いありません。それでも商売のためにこの助言に100%従うということは、本当に忍耐の要ることでしょうね。「この気まずい笑みの意味を読み取れ」という態度をとり続けるのではなく、はっきり“No”と言ってあげることが思いやりのある行動だということですよ。⁶

婉曲と曖昧は違う！

でも、アメリカ人であれば、婉曲表現など不要で、ただ直接はっきりと“No”と言えればそれで十分だというわけではありません。アメリカ人はそんなふうには“No”と言われても全く平気なのだと思いきや、単純に思い込むのは間違っています。実際、アメリカ人でも、いつも直截的にはっきりと“No”と言うわけではありません。スタンフォード大学の法科大学院を出て地方判事の経験がある知人は、私の質問にこう答えてくれました。“No one likes to say no, even in America.”（「ノー」と言うのが好きな人なんて一人もいないわ。アメリカでも。）⁷

つまり、英語ネイティブと話す時、私たち日本語ネイティブが気をつけるべきことは、“Yes”なのか“No”なのか、どちらかわからないような曖昧な返答をするのではなく、人の気持ちに配慮しながらも、はっきりと、わかりやすい“No”を言えるようにすることだということになるでしょう。

誤解を避ける三つの方法

文化の問題は、日本人同士が英語でコミュニケーションする場合には問題にならないことなので、なかなか難しい問題です。でも、日英両言語の言語学的な問題に起因する問題は、比較的簡単に《対

⁵ “How to succeed when doing business in Japan” 2010年10月27日付 Smart Business. 2011年4月24日現在<<http://www.sbnonline.com/2010/10/how-to-succeed-when-doing-business-in-japan-masae-okura-baker-donelson-bearman-caldwell-amp-berkowitz-pc/2/?paging=1>>

⁶ ハル・ヤマダ『喋るアメリカ人聴く日本人』（成甲書房、2003年）のp.164にも全く同様の逸話が紹介されています。ぜひご参照ください。

⁷ 私の私的なアンケートにメールで答えてくれたもの

処療法》を処方することができます。つまり、きちんと英語の授業で練習を積んでいけば割と簡単に解決できるということです。今回は、小学校から中学、高校、大学へと、外国語環境で英語を学ぶ私たち日本人ができる努力を3つ提案します。

1. 《“Yes”なし・“No”なし作戦》— “Yes”も“No”も言わず、結論だけを 言え！

これが史上最強の作戦です。これは、中学でもぜひ取り入れていただきたいと思います。

日本語の「はい」を直訳したものが“Yes”，日本語の「いいえ」を直訳したものが“No”です。ところが、「はい」は、「あなたが（今頭の中で）思っている通りです」という意味であり、「いいえ」は「あなたの思っている通りではありません」ということを宣言することばです。したがって、「あなたが思っている」ことが「私が行かない」で、「私が行かない」というのが「その通りで」で、事実と合致している場合には“Yes”+“I will not go.”と言います。結果として、欧米の人たちは、「はあ〜?! “Yes, I will not go.”???」とびっくりするわけです。わけわかんねえ〜！何、矛盾したこと言っただよ！」と思うわけです。

つまり、元凶は“Yes”という3文字語と“No”という2文字語です。だとすれば、一番手っ取り早いのは、これら2つの元凶を抹殺することですね。つまり、“Yes”とか“No”と言わずに、結論部分だけを言うようにすればいいのです。

A: Do you like cats?

B: I like cats.

A: Don't you like frogs?

B: I don't like frogs.

のように、“Yes”や“No”を付けずに答える練習をすることです。これは何も特別なことではなく、実際、私たちが日本語で行っているコミュニケーションでも、否定疑問に対しては「はい」や「いいえ」を言わずに受け答えをすることの方が多くことに気づくはずで⁸。

⁸ 綿密な談話分析に基づく発言ではなく、家族などとの日常会話の観察に基づくものです。注1の佐々木英樹(1990)。「日本語の

しかし、当然のことですが、やがて子どもたちから『はい』とか『いいえ』は何て言うの?』という質問が出てきます。だから、どうしたらいいの。これには2つの答えがあり、どちらがいいのかはこれからの研究です。

答え A

こちらは私のお勧めです。“Yes”の代わりに nodding (頭を縦に振ること)，“No”の代わりに head-shaking (頭を横に振ること)を教えて、必ずそれをやらせることです。そして、からだで肯定と否定を覚えさせることです。首を縦に振りながら“I don't like...”と言ったら「ブ〜!」。首を横に振りながら“I like...”と言っても「ブ〜!」これを数年間繰り返していけば、どんな子でも体で覚えていくはずだと思います。Nodding という動作と肯定文，head-shaking という動作と否定文が完全に結びつくようになれば、あとは，nodding を“Yes”に，head-shaking を“No”に置き換えればいいだけです。

答え B

こちらは、正攻法です。つまり、はじめから“Yes”と“No”の後に陳述文をちゃんとくっつけて、セットで答える練習を徹底的にさせるということです。私たちが中学生の時代、習い始めの頃は、質問に完全文で答えるのが難しいので、Yes と No だけでいいよと言われてましたが、これからは、そうではなくて、いつも、動詞句とセットで答えさせることが大事ということになります。実際にそのような訓練をしているプログラムもあります⁹。

2. “Operation Right”《Right 作戦》-- 「はい」には“Yes.”ではなく、 “Right.” を使え！

日本語の「はい」は、「あなたが（今頭の中で）

否定疑問文に対する応答文: 英語教育の立場から『駒沢女子短期大学 研究紀要』23, pp.93-101も参考になります。

⁹ この一例を <https://vimeo.com/123809716> で見るができます(1'35"~3'31"の部分)。この“YES, IT IS”という活動を子どもたちがとても楽しんでいるのがわかります。これは、アメリカのミシガン州の移民向けの英語授業の様子ですが、採用されているのは、SPELTの賛助会員でもあるグレーブシティという日本企業が開発したGrapeSEEDというプログラムです。仙台の宮城明泉学園で50年間にわたって行われてきた早期英語教育の実践と研究の成果として開発されたものだそうです。

思っている通りです」という意味であり、「いいえ」は「あなたの思っている通りではありません」ということを宣言することばです。だったら、「その通り」っていうときは、それをそのまま英語にして、ずばり、“You’re right.” と言え方がいいですよ。ね。“You’re right.” は長すぎるので、ただ “Right.” と言え方がいい。否定疑問文に対して自信を持って YES と NO で答えられると感じられるようになるまで、この《RIGHT 作戦》(“Operation Right”) が使えます。実際、私が渡米してからしばらくは、あまりに頻繁に “Yes”/“No” 問題が起こるので、この作戦を敢行しました。私の経験では、この作戦は間違いなく成功します。ただ、相手の言っていることをしっかり聞かず、“Right!” をあいづち代わりに使いまくっていると、“What do you mean by ‘Right?’” (「その通り、ってどういうこと?」) などと突っ込まれることがあります。それに気をつけていれば、この作戦は、ともかくうまくいきます。子どもたちとのやりとりの中でぜひ使ってみてください。

3. どうしても「はい」が言いたければ、“Yes”の代わりに“Uh-huh”を!

前回、“uh-huh”を使うと変な誤解を受けるリスクを減らせると書きました。減らせても無くなるわけではありませんが、確実に減らせます。それは、あいづちとしての“uh-huh”が持っているコミュニケーション上の機能から来るものです。

英語で “Yes” か “No” で答える質問をされた場合、“yes” と “yeah” や “uh-huh” の違いは日本語の「はい」と「うん」の違いと同じものになります。つまり、“yeah” や “uh-huh” はなれなれし過ぎて、“yes” よりも敬意や丁寧さの度合いが低いという違いがあります。でも、どれも「同意している」という意味が伝わる点では同じです。ところが、“yeah” や “uh-huh” が「あいづち」として使われる場合には、同意を表す “yes” とは異なる働きをします。このことは、アメリカ人の2倍のあいづちを返すとされている日本人¹⁰ にとっては極めて重要です。な

ぜなら、日本語のくせでつい口をついて出てしまうあいづちの「はい」を “yes” で代用してしまい、自分が同意してもいないことに同意していると勘違いされてしまうという日本人の悩みを、その “uh-huh” の機能が解決してくれるからです。では、“uh-huh” にはどのような機能があるのでしょうか。

英語の “Yes”, “Uh-huh”, “Yeah”, “I see”, “Oh” のような、日本語の「あいづち」に当たる表現は、言語学者の間では “backchannel”¹¹ という言葉で呼ばれています。英語で “backchannel” という言葉は「裏ルートで極秘に連絡を取る」という意味ですから、「会話の中で(聞き手から話し手に向けて)暗黙のメッセージを送り返す」ために使われる表現のことを指しているわけですね。その「暗黙のメッセージ」というのは実に様々で、「どうぞ続けて話してください」から、「それは初耳です」・「ところで、ちょっと話題を変えたいのですが」、さらには、相手が言った事柄について「ちゃんと聞いていましたよ」・「感想を言いますと…」・「理解しました」・「関心を持って聞いていますよ」まで、多岐にわたります。

そんな “backchannel” 表現の中で、“uh-huh” や “yeah” は、同意や賛同を表すためというよりも、「どうぞ続けて話してもらっていいですよ」というメッセージを伝えるために使われるという研究¹² があります。また、“yeah” も “uh-huh” も、同意を表すためではなく、「あなたが今言ったことに関連して話したいことがあるので、次に私に話す番を回してもらいたい」という発話権の請求をするために使われるという研究報告もあります。その報告で特に興味深いのは、“yeah” が2回に1回の割合で発話権を求める表現として使われるのに対して、“uh-huh” は25回に1回だそうです¹³。あいづちとしての “uh-huh” の意味や機能の解釈は個々の研究によって異なっているようですが、あいづちの

学紀要』, 37. の p. 48 参照。

¹¹ Yngve という言語学者が1970年に使い始めた用語。Yngve, Victor H. (1970). On getting a word in edgewise. *Papers from the 6th Regional Meeting*, Chicago Linguistics Society. Chicago: Chicago Linguistics Society.

¹² Schegloff, E. (1982). Discourse as an interactional achievement: Some uses of ‘uh huh’ and other things that come between sentences. In D. Tannen (Ed.), *Analyzing discourse: Text and talk* (pp. 71-93). Washington: Georgetown University Press. この文献の p.81 を参照。

¹³ 上掲論文(注9)Fujimoto, D. T. (2007). p.46 参照。

¹⁰ Fujimoto, D. T. (2007). Listener responses in interaction: A case for abandoning the term, backchannel. 『大阪女学院短期大

“uh-huh” が同意を伝える表現として解釈される可能性が低いということは間違いないようです。

まとめ

これまで述べてきたことをまとめると、もし私がどこかの小中一貫校のコンサルタントになったら、多分次のようなことを徹底してくださいと助言すると思います。

小学校では、次の3つの《徹底》をお願いします。

- 質問に答える時の「はい」は“Yes”，あいづちを打つ時の「はい」は “Uh-huh” というよう徹底する。
- 質問に答える時は，“Yes”の後に肯定文，“No”の後に否定文と一緒に言え！言えなければ“Yes”も “No”も使え！と徹底する。
- 上の2つが完全にできなければ，“Aren't you/Isn't it...?” や “Don't you/Doesn't it...?” と聞かれた時の「はい」は“Right”と言え！と徹底する。

そして、中学校でも、口頭でのコミュニケーションでは、継続して上の3つの《徹底》を守らせつつ、中学1年生では、次のような練習問題もやらせて、

それまで続けてきたことを紙上で確認させます。

次の各質問に対する答えのうち、普通は言わないものが2つずつあります。それを二重線で消しなさい。

□Don't you like *sashim*? (刺身は好きじゃないの?)

1. Yes, I like it.
2. No, I like it. (←二重線を引く選択肢)
3. Yes, I don't like it. (←二重線を引く選択肢)
4. No, I don't like it.

□Isn't this your pencil? (この鉛筆、君のじゃない?)

1. Yes, it is my pencil.
2. No, it is my pencil. (←二重線を引く選択肢)
3. Yes, it isn't my pencil. (←二重線を引く選択肢)
4. No, it isn't my pencil.

小学校からこれだけのことをやっておけば、日本人が “yes”/“no” 問題で嘘つき呼ばわりされる時代は必ずや **history** (過去の話) になると、私は信じています。



お知らせ

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。締切は9月末日ですので、皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

◆研究大会について

10月に研究会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。**10月の研究会で討議したいテーマやご意見をみなさまから募集しております**ので、7月中旬をめどにお気軽に事務局までお寄せください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。



編集後記

少し遅くなってしまいましたが、今回は、第5回研究大会の様子をお届けしました。研究大会では、英語の授業で生徒に身につけさせたい「コミュニケーションの力」とはどのようなものか、改めて考えることができました。次回は、10月に研究会を予定しています。多くの方のご参加をお待ちしています。

実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2016年5月15日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。